

4 「月に架かる二輪の薔薇よ」

お屋敷に住んでいたのは一人の貴婦人
大きな瞳 背が高く華奢な^{からだ}肢体
真昼からずっと歌をうたい続けていた
「月に架かる二輪の薔薇よ」

馬にのってやってきたのは一人の騎士 5
雨も降らない早春のころ
真昼にうたう貴婦人の歌声を耳にした
「月に架かる二輪の薔薇よ」

だが騎士は少しも立ち止まることなく 10
速駆けでお屋敷の前を通り過ぎ
真昼にうたう貴婦人の歌声を後にした
「月に架かる二輪の薔薇よ」

^{いくさ}戦はすでにはじまり
緋色と藍色の両軍が待ち構えていたから
あくる日の暖かな真昼まで騎士は拍車をかけ続けた 15
「月に架かる二輪の薔薇よ」

^{いくさ}戦は丘から丘へと広がった
こちらの風車からあちらの水車まで
真昼に近づくころ 騎士は誰にともなく呟いた
「月に架かる二輪の薔薇よ」 20

^{こんじき}金色の兜も^{ぐんか}軍靴も
緋色と藍色に飲み込まれた
真昼に戦が激しくなると 騎士は叫んだ
「月に架かる二輪の薔薇よ」

群れ集まる緋色と藍色の槍の中を 25
^{こんじき}金色の軍旗が突き進んだ
真昼に敵を討ち果たすと ^{みな}皆は叫んだ
「月に架かる二輪の薔薇よ」

土砂降りの雨も厭わず
騎士は再びお屋敷に駆け戻り 30
真昼に熱い口づけをした
「月に架かる二輪の薔薇よ」

さんざし もと
山査子もとの下で娘は冠を授かった
輝くばかりの純金の冠だった
真昼のお屋敷で角笛が高らかに鳴った 35
「月に架かる二輪の薔薇よ」

(福山真季・原由子寄稿)